
夏目漱石『それから』における
徴兵忌避の「沈黙した声」
「死」への恐怖と「名誉」への憧憬

QI Jinying

齐金英

1. はじめに

夏目漱石『それから』（一九〇九年六月二七日—一〇月一四日『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に掲載）は、「それから」の時空間を豊かに内包した作品である。「それから」という言葉自体には、過去のある時点から、現在に至るまでの時間の広がりがあるが、『それから』の語り手はたびたび過去に遡上し、「それから」の時空間を読者の前に手繰り寄せている。また、登場人物の会話に現れる「それから」は、「登場人物の情緒を牽引し、その輪郭を露わにする」と同時に、「登場人物や読者の意識が運動する」ように仕組む⁽¹⁾。テキストのこの多層的な時間が入り混じった構造は、単に過去を召喚することに止まらず、さらに「それから」への認識を改め、「それから」の情緒を甦らせることにもつながっている。これが端的に表れているのは、代助が「自然の昔」（二七一頁）⁽²⁾に〈回帰〉し、三千代との間の「自然の愛」（二二五頁）を〈発見〉し、この「自然の愛」を全うするために「戦ふ」（二八六頁）という恋愛ストーリーにおいてである。一方、語りの表層から掬い取れるもの以外にも、主人公の意識や無意識の狭間でさまよう情緒から浮かび上がってくるもの、また、語られていないにもかかわらず、テキストの行間でほのめかされているものがある。

ベンヤミンは、「過去という本にはひそかに索引が付されていて、その索引は過去の解放を指示している」、「ぼくらが耳を傾ける様々な声のなかには、いまや沈黙した声のこだまが混じってはいないか？」⁽³⁾という。個人や社会的な「過去」を豊かに内包している文学テキストの読解にもこれは適用できるだろう。『それから』では、言葉はもちろんのこと、音、色、香、髪形、花、指輪、登場人物たちのさりげない目つきや仕草の一つひとつまでもが、「過去」を甦らせるモチーフとして機能している。そして、漱石のテキストにしばしば現れる謎や空白も、語り手により明確な解釈をあたえられていないにもかかわらず、ひそかに「索引」が付された「沈黙した声」で何かを物語っている。『それから』の先行研究では、語りにより前景化された代助の「自然の愛」については、多角的に読解されてきた。また、代助と三千代との間の情緒や記憶が重層的な「それから」の時間の創出のなかで浮かび上がってくる様相についても、緻密な先行研究がすでにある⁽⁴⁾。だが、代助の無意識の所作言動が物語っている彼自

(1) 野網摩利子『夏目漱石の時間の創出』東京大学出版会、二〇一二年三月、四二—四三頁。

(2) 本稿の『それから』からの本文引用は『漱石全集』第六巻（岩波書店、一九九四年五月）による。

(3) ヴァルター・ベンヤミン著、野村修訳「歴史の概念について」、今村仁司『ベンヤミン『歴史哲学』一冊精読』岩波書店、二〇〇〇年十一月、五四頁。

(4) 例えば、野網摩利子は登場人物の会話に現れるいくつかの「それから」にそれぞれ込められた時

間が何時からかについて詳しく分析し、「それから」がいかに、「代助の情緒や神経の秘められた進行と結合とを現し」、「三千代と代助とを結ぶ要として、この小説に張り巡らされ、働いている」かについて指摘している（野網摩利子『夏目漱石の時間の創出』東京大学出版会、二〇一二年三月、四六—六〇頁）。

身の「それから」、および父親との関係性から浮かび上がってくる日清、日露戦争以来の時代的、社会的「それから」、またこれらが「自然の愛」と如何に共振しているのかに対する検証はまだ不十分である。

例えば、『それから』の冒頭では、なぜか異常に心臓を気にする代助の「近來の癖」(三頁)が前景化されている。先行研究では、この冒頭のシーンと三千代との関連がたびたび指摘されてきた⁽⁵⁾。しかし、三千代との関連だけでは済まされない何かがここでほめかされているのも間違いない。「『迸る血』を連想させる」⁽⁶⁾、「不吉の象徴である」「首がおちるような椿の花」⁽⁷⁾が引きおこす死の恐怖は、肉体が破壊され突然命が中断されるイメージを醸し出す。では、何が代助にこのような恐怖をもたらしているのか。代助の年齢と身分から考えると、日露戦争前後の徴兵制を想起させる。実際、テキストのなかで召喚される四、五年前はちょうど日露戦争中にあたる。この時期に戦場満洲では大量の日露両国の若者が最新兵器により肉体が破壊され、無残に命が突然中断されていた。一方、銃後の若者は兵員補充のための徴兵対象になっていた。代助の死への忌避と徴兵制との関係は、今迄の先行研究では看過されてきた。本稿では、時代的、社会的な事象と密接な関係にある代助個人の「それから」に関する「沈黙した声」をテキストの中から掘り上げていくことを目指したい。

2. 冒頭シーンの「沈黙した声」

2-1. 「心臓」と「それから」

『それから』の冒頭は、謎めいた描写から始まる。主人公代助の目覚めと夢の狭間で「大きな組下駄が空から、ぶら下がってゐた」(三頁)。夜中に一輪の椿が昼に落ちる音を「護謄毯を天上裏から投げ付けた程に響いた」ように聞いたとき、彼はなぜか心臓を気にしていた。そして目覚めてから「赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めて」(三頁)、再び心臓のことを思い出す。彼は「時計の針に似た響は、自分を死に誘ふ警鐘の様」だと考えると同時に、「静かな心臓を想像するに堪へぬ程に」「生きたがる男である」(四頁)。「時計」、「赤ん坊」の「死」、三千代を平岡に周旋した代助の「身体」。確かにこれらはこの時点ですでに代助の意識

(5) 例えば、『時計』『心臓』『死』『赤ん坊』——このシリーズ化された名詞群の指し示す宛先は、たった一つ、三千代しかない」という指摘(石原千秋『反転する漱石』(増補新版)青土社、二〇一六年九月、二四六頁)や、三千代を平岡に周旋した代助の身体がここで「心臓を患った三千代に共鳴」しているという指摘(野網摩利子『夏目漱石の時間の創出』前掲、四四頁)がある。

(6) 浜野京子「〈自然の愛〉の両儀性」、太田登・木股知史・萬田務『漱石作品論集成【第六巻】それから』桜楓社、一九九一年九月、一四九頁。

(7) 多田道太郎「香りの奥にひそむもの」、太田登・木股知史・萬田務『漱石作品論集成【第六巻】それから』前掲、一七二頁。

の中に存在していた。これらの事象はその後のプロットの展開を暗示しているようでもある。だが、確認すべきことは、この冒頭の時点で、つまり三千代夫婦が帰京する前に、代助がすでに三千代の心臓の病を察知していたかどうかである。この肝心なところが、テキストのなかではなぜか曖昧にぼかされている。

帰京後の平岡に初めて会ったときに、代助はすかさず「それから、以後何うだい」（一六頁）と訊ねる。先行研究ですでに言及されているように、ここでの「それから」とは、結婚後すぐ三千代を連れて「京坂地方」に行ってしまった平岡との頻繁だった「手紙の遣り取りが疎遠になって」（二〇頁）からのことであると推察できる⁽⁸⁾。代助は明らかにその後の夫婦の状況を知りたがっている。平岡もまた明らかにこの問題から逃げようとしている。「何うの、斯うのつて、——まあ色々話すがね」（一六頁）と逃げ腰のようすで、「僕より君はどうだい」（一七頁）と話を逸らす。代助から三千代のことを聞こうと切りだしたのは、ようやく別れ際になってからのことだった。

三年ぶりに再会した二人の会話からはいくつかの問題が浮かび上がってくる。一つは、子供が死んだことが平岡と代助との言葉の応酬に出てくるが、三千代の心臓の病の話は全く言及されていない。もう一つは、三千代を連れてきていない理由を「何だか汽車に揺れたんで頭が悪いといふ」（三〇頁）ことにし、平岡は三千代の心臓の病をわざと隠しているように見える。今一つは、もしこの段階で仮に三千代の心臓の病を知っていたとしたら、「まだ後は出来ないか」（三〇頁）と三千代の心臓の病ではなく子供のことを訊ねるのは不自然である。なぜなら、三千代がかかったのは「根治は覚束ないと宣告された」「六づかしい名の心臓病かも知れない」（六二頁）ことを知っていたなら、子供を作るのが困難であることは代助にもわかるはずである。テキストの中で、三千代の心臓に関する詳しい話が語りの表面に現れるのは、彼女が初めて一人で代助に会いに来た時である。「三千代は東京を出て一年目に産をした。生れた子供はぢき死んだが、それから心臓を痛めたと見えて……〔中略〕是は三千代が直に代助に話した所である」（六二頁）と。ここの「それから」は代助が平岡に尋ねた「それから、以後何うだい」の「それから」と一致しているとも言える。平岡がわざわざ遮断したい情報は、三千代が直に代助に教えないかぎり、代助に伝わるはずもない。心臓の問題が曖昧に語られることによって、代助のこの「近來の癖」に、三千代以外の原因が潜んでいる可能性が示唆されている。「自分を死に誘う警鐘」という表現にあるように、それはむしろ代助自身の死へ

(8) 野網摩利子はここの「それから」について同様な指摘をしている（野網摩利子『夏目漱石の時間の創出』前掲、四〇-四一頁による）。

の恐れに関わる問題である。

この冒頭シーンでは、音に対しても関心が払われねばならないだろう。「大きな俎下駄が空から、ぶら下がつてゐた」のは、「誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時」であり、それはまた「足音の遠退くに従つて」（三頁）消えている。また、代助が夜中に心臓を気にし出したのも落ち椿の音に怯えた時である。この音と共に現れる「俎下駄」や「護謨毬」のイメージは、どちらも無防備に横になっている肉体にダメージが与えられることへの恐怖につながる。代助の「鋭い」「聴神経」（一六一頁）がキャッチしている音のイメージは、代助の意識と無意識の狭間の肉体破壊への恐怖と不安を物語っている。

2-2. 「近來の癖」と徴兵忌避

まず、心臓を気にする「近來の癖」（三頁）の「近來」も「年数をぼやかした表現」であり、「三年程の間」という「意味付けを許す」という見方もある⁽⁹⁾。「又神経だ」（八九頁）と長井家の人たちは代助の神経質な「癖」を長い間見てきたようだ。書生の門野も「此間から代助の癖を知つてゐる」（一三頁）。一方、代助自身は「もう病氣ですよ」（一三頁）と自認してしまう。確かに、門前の足音や落ち椿の些細な音、さらに赤だろうと推測される椿の色に過剰に刺激されて戦く反応は、過去のトラウマ（心的外傷）が何かのきっかけで不意に思い出されるフラッシュバックの症状でもある。代助は「何事によらず一度気にかゝり出すと、何処迄も気にかゝる男である」（七二頁）。彼は過去のある時点で強い衝撃や死の恐怖を体験し、その記憶が時々脳裏によみがえるのだろう。「音」や「色」に「神経」が過敏に反応する冒頭のシーンは、代助の意識と無意識の狭間で彼を脅かすイメージが構成されていることを思わせる。「近來の癖」とは代助の「それから」に通じる「索引」なのだ。

「代助は子供の頃非常な肝癰持で、十八九の時分親爺と組打をした事が一二返ある位だが、成長して学校を卒業して、しばらくすると、この肝癰がぱたりと已んで仕舞つた」（三四頁）とあるように、大学卒業した後の四年前が一つの転換点であるようだ。三〇歳という今の年齢から逆算すると、この時の代助は二六歳であった。四年前の一九〇五年は日露戦争であったこと、二六歳という年齢、また東京帝国大学を卒業間近であったこと、ここから想起できる代助にとっての衝撃的な事件とは徴兵検査のほかにあるまい。徴兵検査には心臓の検査が必須であった。この時の心臓検査で心臓を異常に気にする「癖」が付いたと思われる。作

(9) 石原千秋『反転する漱石』前掲、二四六頁。

品が発表されたのは一九〇九年で、作品の内部時間がほぼ外部の現実的な時間と同時進行だと仮定した場合、四年前の一九〇五年春は、まだ日露戦争の真最中であった。このころ、日本側の死傷者が予想以上に多くなったことを受け、一九〇四年の徴兵令改正のもとで、補充兵が大量に増徴されていた⁽¹⁰⁾。椿をはじめ、多くの場面で代助が忌避している赤は、まさに血の色であり、召集令状の「赤紙」の色である。ただし、休戦協定が結ばれたのは一九〇五年九月一日⁽¹¹⁾で、七月に卒業した代助は卒業ぎりぎりでも戦争参加の恐怖から免れる僥倖に恵まれたと推察できる。

しかし、この恐怖体験は根深い痕跡を代助の心に刻んでいるようだ。日露戦争開戦直後に「軍神と迄崇められた」（二四六頁）広瀬中佐のことを代助は未だに鮮明に記憶している。彼が当時読んでいた新聞はこの時戦況報道が紙面を賑わし、また大量の戦死者の報道をしていた。「アンドレーフ」の「七刑人」⁽¹²⁾における刑死の場面を読んで、代助は「万一自分がこんな場に臨んだら、どうしたら宜からうといふ心配」（五四頁）をしてしまう。そうであれば、日露戦争の戦死報道は彼に「万一自分が」という想像を当然もたらしただろう。「逆しる血の色を見て、清い心の迷乱を引き起さないものはあるまいと感ずる」ほど「神経の鋭い」（一五一頁）代助が「七刑人」を読んでいた時と似たような体験を四、五年前に新聞の戦時報道を読みながら余儀なくされていたことは想像にかたくない。容易に殺戮の場面を脳裏に浮かび上がらせていた代助は「心の迷乱を引き起さない」はずであろうか。代助の恐怖は否が応でも増長したに違いない。この時の恐怖が特に赤という血の色に凝縮し記憶され、意識のコントロールを逸脱した形で不意に彼を襲っていると思われる。

日本の徴兵制は明治六（一八七三）年に発足し、それが例外を認めない「国民皆兵」にシフトしたのは明治二二（一八八九）年の改正後である。そのときに「日本帝国臣民にして満十七歳より満四十歳迄の男子は総て兵役に服する義務のあるものとす」と定められた⁽¹³⁾。ただしそこには例外もあり、満十七歳以上満二十六歳以下官立学校の在校生には一年間の志願

(10)加藤陽子『徴兵制と近代日本 1868-1945』吉川弘文館、一九九六年一〇月、一四五-一四七頁。

(11)原田敬一『日本近現代史 3 日清・日露戦争』岩波書店、二〇〇七年二月、二一九頁。

(12)「七刑人」はアンドレーフの一九〇八年の作品である。日本語訳『七死刑囚物語』（相馬御風訳、海外文芸社、海外文芸叢書）が出版されたのは一九一三年である。一九〇九年三月十二日の漱石の日記に「アンドレーフの独訳ジーベン、ゲヘンクテンの一章を豊隆に読んでもらふ」（「ジーベン、ゲヘンクテン」は『七死刑囚物語』である。『漱石全集』第二〇巻、岩波書店、一九九六年七

月、七、五六七頁による。）と記されてあるように、この時期は日本でアンドレーフの作品のドイツ語訳を手に入れることが可能だったことがわかる。すると、ドイツ語ができる代助が読んでいたのはドイツ語訳だと推察できる。

(13)大江志乃夫『徴兵制』岩波新書、一九八一年一月、八三頁。

兵制度が適用された⁽¹⁴⁾。この猶予年齢は明治二六（一八九三）年に満二八歳以下と改正された（大正七年まで変わっていない）⁽¹⁵⁾。だが、二十六歳という明治二二年に定められた年齢が、もっと人々の記憶に残り、学生における徴兵の象徴的な年齢になっていた可能性もある。いずれにせよ、代助は一年間志願兵に応募していないうえに、徴兵免除が適用される「官吏及び市町村長」⁽¹⁶⁾でもない故、卒業すれば必然的に徴兵検査の対象になる。明治三七（一九〇四）年度の徴兵数は「一〇一万八二四七人」⁽¹⁷⁾であったが、日露戦争の膠着によって大量の死傷者が出たことを受けて翌年には「四個師団が急増され」⁽¹⁸⁾、日露戦争後も「軍備拡張」が続いた⁽¹⁹⁾。こう考えると、「健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事実を、殆んど奇跡の如き僥倖とのみ自覚し出す事さへある」（四頁）という代助の気持ちも理解できる。代助を含め、多くの「健全」な若者たちは、徴兵の危機に直面していたはずである。つまり、彼らは死を覚悟せざるを得ない状況下におかれていたのだ。

徴兵では、徴兵検査結果が甲種、乙種に合格した青年から優先的に抽選で召集が行われる。一方、「筋骨薄弱」と「近視」などの場合に認定される丙種は、召集される可能性がほぼなく、「実質的には平時免役にひとしかった」⁽²⁰⁾。眼鏡をかけていたのでおそらく丙種に分類されると思われる平岡と違い、「脊の低い方ではない」（七五頁）、「二三年このかた風邪を引いた事も」（三九頁）ない、「健全」な身体を持つ代助は甲種か乙種に合格する可能性が大きい。代助が徴兵を免れた理由は明らかではないが、「学校を出た時少々芸者買をし過ぎ」た（八〇頁）ことが一つの手掛かりを示している。徴兵検査では性病が伝染病として厳しい取り締まりの対象とされていたからだ。実際、当時の学生の性病罹患率が三、四割であったことから推察するとこの可能性は否めない⁽²¹⁾。また、ほぼ同じ時期に、代助は「気狂になる時の状態に似て居はせぬかと考へ」、「不明瞭な意識」を「明瞭な意識」で「回顧しやう」と「試み」（七三頁）ている。それはあたかも彼が精神的な不安に陥っていたかのようだ。代助は学校を卒業したあと徴兵

(14) 明治二二年改正徴兵令第二十一条に、(官立)

「学校ニ在校ノ者ハ本人ノ願ニ由リ満二十六歳迄徴集ヲ猶予ス其事故満二十六歳迄ニ止ミ又ハ二十六歳ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ抽選ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徴集ス但第十一条ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者ハ此限に在ラス」とある。(菊池邦作『徴兵忌避の研究』立風書房、一九七八年一月、一九三―一九四頁による)。

(15) 大江志乃夫『徴兵制』前掲（八五頁）、加藤陽子『徴兵制と近代日本 1868-1945』前掲（一六三頁）による。

(16) 菊池邦作『徴兵忌避の研究』立風書房、一九七八年一月、二五三頁による。

(17) 大江志乃夫『徴兵制』前掲、九三頁。

(18) 加藤陽子『徴兵制と近代日本』前掲、一四六頁。

(19) 大江志乃夫『徴兵制』前掲、一〇〇頁。

(20) 大江志乃夫は近視による丙種合格は高学歴層に多く、「国民皆兵」原則の「最大不公平」だと見ている。(大江志乃夫『徴兵制』前掲、八七頁)。

(21) 澁谷知美『立身出世と下半身 男子学生の性的身体管理の歴史』洛北出版、二〇一三年三月、三七四―三九九頁による。

忌避に苦心していたと思われる。代助のこの窃かな〈戦い〉を応援してくれたのは兄の誠吾であろう。代助は「芸者買をし過ぎて」、「其尻を兄になすり付けた覚はある。其時兄は叱るかと思ひの外、さうか、困り者だな、親爺には内々で置けと云つて嫂を通して、奇麗に借金を払ってくれた。さうして代助には一口の小言も云はなかつた」(八〇頁)。誠吾が「親爺には内々で」と言ったのは代助の性的放蕩ではなく徴兵忌避を得に知られては困るからである。この時は気前よく代助の窮状を救った誠吾だが、代助に三千代のために金策を頼まれた時には断っている。その理由に挙げたのは、「徴兵検査で急に国へ帰らなければならない」(八一頁)人のための金策を断ったという話であった。「動かすのは、同じ仲間の実業家でなくつちや駄目」(八三頁)だという誠吾は金銭の貸し借りに厳格であった。にもかかわらず弟の「放蕩費を苦情も云はずに弁償して呉れた事」(八三頁)の意味がここから示唆される。誠吾は徴兵忌避のためなら「放蕩費」でも惜しみなく出すが、それと無関係なことなら断るのだ。これもまた明らかにテキストに仕掛けられた「索引」である。代助に金策を頼まれた誠吾は昔弟の徴兵忌避のための「借金」を払った記憶が甦り、その延長線上に徴兵検査で国へ帰る若者のことが意識に浮上し、ついでにそれを話したと思われる。徴兵検査で国へ帰る人のための金策を断ったという話は、そうした誠吾の考えを暗示するためにしかけられた「索引」と読むことができるのだ。この時の誠吾の助けが功を奏したか、代助は結果的に徴兵されなかった。だが、日露戦争が終結後も、彼は徴兵されて戦場で殺される恐怖から簡単には解放されなかったのである。

2-3. 「国民の義務」と青年の危機

代助の代わりに「放蕩費」を払った誠吾が「親爺には内々で」と言ったのは、父親の得が代助の戦争参加を期待していたからだ。「胆力修養」(三六頁)を重視する得の「薫育」(三四頁)により、代助は「子供のうちは心魂に徹して困却した事がある」(三四頁)。三十歳の今は〈面従腹背〉の冷淡な関係を保っている。得は自分が戦争に参加したことを自慢し、代助にも「度胸」と「胆力」を一番に求めている。「御前杯はまだ戦争をした事がないから、度胸が据らなくつて不可ん」(三五頁)と言い、また「世の中もある、国家もある。少しは人の為になんかなくつては心持のわるいものだ」(三七頁)、「奮発して何か為るが好い。国民の義務としてす

るが好い」、「金は取らんでも構はない」(三八頁)とも言う。戦争に参加することを誇りに思い、度胸を重視する彼による「胆力の講釈」(三五頁)は、徴兵を忌避せんがために藻掻いていた代助にも発せられ続けただろう。

父の「胆力修養」に対する代助の「肝癰」は、卒業まもなく「ぼたりと已んで仕舞つた」(三四頁)。それは、代助自身が「臆病」は「自分の本来」(三六頁)だと信じるようになったことが一因であろう。同時に、卒業後間もなくして、日露戦争が終結したことも看過できない。戦争の終結により現実的な戦死の脅威がなくなったからである。だが、日露戦争が代助にもたらした死への恐怖は彼の「不明瞭な意識」に身を潜めただけである。それはまるでアンドレーエフが一九〇五年に書いた『血笑記』⁽²²⁾で描かれている日露戦争の戦死者の最期の「赤い笑」の名残に囚われて狂気に陥っていくロシア人兄弟のようだ。弟は代助と同様、戦争に参加していない。実際、代助は自分の頭の「其底には微塵の如き本体の分らぬものが無数に押し合つてゐた」(八五頁)ことを自覚している。この無意識に押し込まれた恐怖はしかし、些細なきっかけで召喚される。それが落ち椿の音と色であった。それらは代助において、心臓が破壊されるイメージへといとも簡単に変換されるのであった。『草枕』(一九〇六年九月)の中では、椿の色が「屠られたる囚人の血」のような「異様な赤」だと描写され、「ぼたりと」落ちる様子が「血を塗った、人魂の様」に写し出されている(『漱石全集』第三卷、岩波書店、一九九四年二月、一二一―一二二頁)。志願兵として満洲の戦場に赴く青年久一を前に、「画工」は「朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、此青年の動脈から迸る時が来るかも知れない」(同一〇五頁)と思いを馳せる。一方、那美は久一に「死んで御出で」(同一七〇頁)と声をかける。「画工」も那美も同じ結末を想像していた。久一の徴兵は一九〇五年春と推定できる。旅順包囲戦を始め、日本側が凄惨極まりない戦闘を強いられ、夥しい戦死者を出したあとのことだ。そうした中で戦場に赴くことが否が応でも死を想像させずにはおかまいであろう。戦争終結までの間、多くの青年が死の恐怖に戦っていただろう。

落ち椿の冒頭シーンもまた、「索引」として機能し、テキストの時間に亀裂を走らせる。徴兵と死に対して孤独に怯えていたのは代助だけではない。日露戦争当時の青年たちは多くが同様の危機的状態におかれ、徴兵忌避という人知れないタブーは、彼らの「沈黙した声」となって〈語られる〉のだ。

(22)『血笑記』はアンドレーエフの一九〇五年の作品である。日露戦争の死と血の恐怖体験とその後の狂気に満ちた心的外傷を赤裸々に描いている。二葉亭四迷による日本語訳は易風社から一九〇八年に出されている。漱石の作品にも度々登場しているが、アンドレーエフの作品は当時

日本で広く読まれていた。

3. 「死生観」と「知行合一」の虚偽

こうした危機的状態におかれたからこそ、代助は父親や日本の「それから」に思索をめぐらせることができた。得は元武士出身で、切腹の危機を潜り抜け、維新の戦争にも参加していたという。「誠之進」から「得」への転身は、二つの時代における彼の生きざまを物語っている。「誠」を捨てて「此十四五年来は大分の財産家になった」（三一頁）という彼は、時代の波に乗り、日清、日露戦争の都度財産を増やし、「得」をしてきた。一方、三千代の父親の場合、「日露戦争の当時、人の勸に応じて、株に手を出して全く遣り損なつて」、「潔く祖先の地を売り払つて、北海道へ渡つた」（二三四頁）。三千代夫婦もまた、「此十数年来の物価騰貴に伴れて、中流社会が次第々々に切り詰められて行く有様」（九一頁）を「代表する最高の象徴」（九二頁）となっている。このように、菅沼家の人々は、得とは対照的に日露戦争で財産を失っているのであり、まさにその「暗黒」（一〇二頁）の部分映し出している。

得は、代助への「薫育」において、「胆力」以外に「誠実と熱心」（四二頁）を中心課題に据えた。しかし、代助は父の教えに対して、「論語だの、王陽明だのといふ、金の延金を吞んで」、「延金の儘出て来る」（四二―四三頁）ようだと批判している。彼には、得は「熱誠」を会得していないものと見えた。

代助は父の人格を信頼していない。「生活慾の為に腐蝕されつゝ今日に至つた」にもかかわらず、「誠実と熱心」を唱える父は、「自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足らない愚物か」（一四三頁）のように映じたのである。「父と兄の財産が、彼らの脳力と手腕丈で、誰が見ても尤と認める様に、作り上げられたとは肯はなかつた」、「人為的に且政略的に、暖室を造つて、拵え上げたんだらうと代助は鑑定してゐた」（一二六頁）。つまり、「誠者天之道也」を誇るべき「知」として掲げる得は、決してそれに従って行動しているとは限らない。中国明代の儒家王陽明は、『伝習録』において「知の真切篤実なところがすなわち行である。行の明覚精察なところがすなわち知である。知・行の修行はもともと切り離すことができない」と説いている⁽²³⁾。つまり、王陽明は孔子や孟子から受け継いだ儒教の倫理的思想の根幹をなす「誠」や「仁」、利他的な「致良知」が、現実の中で実際に行動に移されて、やっと「知」として認められると主張している。代助は、父親における「知行合一」ならぬ、「知行」の分裂を見抜いていたのだ。得が迫る戦争参加の圧力に抗するためにも、代助は得の実像を捉える必要があった。

さらに看過できないのは、得の説く青年への教化言説は時代遅れでも何でもなく、実は時

(23)『伝習録』からの引用は、アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』知泉書館、二〇一〇年六月、五三二頁による。

代の教化言説そのものであるという現実だ。

この時期の死生観の代表的な言説に、加藤咄堂『死生観』（一九〇四年）や新渡戸稲造『武士道』（“*BUSHIDO The soul of Japan*”は一八九九年にアメリカで出版されたあと一九〇〇年に日本でも出版され、一九〇八年に日本語訳が出版された。）がある。島蘭進によれば、武士道は「軍隊を代表とする天皇への忠誠心に日本の精神的伝統の神髄を見ようと」、「新しい時代の精神的欠落を埋める有望な精神的資源と見なされた」⁽²⁴⁾という。「死を意識しつつ悟りを得る」⁽²⁵⁾、「生命より価値があると考えるに足るものがあれば、きわめて穏やかに、そしてすみやかに生命を棄て」⁽²⁶⁾るという死生観は、日露戦争前後の日本社会では支配的であった。『伝習録』には「人が生死を念頭に置く」ことを、「捨て去るのは難しい」が、「もしそれを達観し貫通してしまえば、この心の全体は、滞ることなく流れ出す」とある⁽²⁷⁾。ここには咄堂や新渡戸の「悟り」の「死生観」に相通じているところがあるだろう。だが、彼らの武士道の死生観が「天皇への忠誠」という外在的な倫理道德規準に結びついていたことには注意すべきだろう。なぜなら、小島毅が指摘するように、同じ陽明学とは言え、「他者や外界に倫理道德の規準を求めるのではなく、自分のなかに、その心の自然なはたらきにおいて、道德性を見ようとする」ことを『良知』の発動」と認識した大塩平八郎のような例もあったからだ⁽²⁸⁾。明治の陽明学は、日露戦争における国民の戦死を「国民の義務」、国家や天皇のための「名誉」の死として正当化する言説を提供することになったのである。

代助の死に関する恐怖と忌避は、同時代の支配的な死生言説から逸脱している。未だに実家から経済援助を受けている彼にはもとより得の説教に抵抗する力は乏しかった。だが、彼の死への忌避は、帝国主義的拡張原理に寄与する武士道の死生観に亀裂を走らせ、時代の支配的な言説を脱臼させる効果を持っている。代助の死に対する忌避の物語において戦場と銃後の犠牲者たちの「本来」の声が「解放」されるだろう。日露戦争当時メディアにあふれていたのは、「名誉なる戦死」や「義侠心」であった。その背後で、戦死を遂げて「英雄」に祭り上げられた若者や、死への恐れから徴兵義務におののいていた「健全」な若者たちが抱えていたはずの「生きたがる」人間「本来」の声なき叫びは黙殺される。

このように、得と代助親子という「人間の仕事の〈なかに〉」、時代が「保存され、止揚され

(24) 島蘭進『日本人の死生観を読む 明治武士道から〈おくりびと〉へ』朝日新聞出版、二〇一二年二月、八二～八三頁による。

(25) 島蘭進『日本人の死生観を読む 明治武士道から〈おくりびと〉へ』前掲、一六八頁による。

(26) 新渡戸稲造著、山本博文訳『現代語訳 武士道』ちくま新書、二〇一〇年一〇月、九五頁。

(27) アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』前掲、五二九頁。

(28) 小島毅『近代日本の陽明学』講談社、二〇〇六年八月、二七頁。

ている」⁽²⁹⁾のである。

4. 「名誉」と徴兵忌避

4-1. 「鍍金」と「名誉」

得が代助に求める「熱誠」は、もう一つの心的外傷を代助にもたらしている。東京で親友平岡と再会した代助は、つくづく「自分が三四年の間に、是迄変化した」(九七頁)と意識している。彼が「自分から三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自分の道念を誇張して、得意に使い回してゐた」と思うのは、「親爺が捺摺り付けた」「鍍金」を「自分で剥がして来た」(九六頁)からだ。三四年前とは、ちょうど平岡と「兄弟の様に親しく往来した」(二〇頁)頃であった。その頃、得に「捺摺り付け」られた代助の「道念」の「鍍金」はまだ完全に剥がれていなかった。そして、「親爺」も、「相当の教育を受けたもの」も、「みな金に見えた」(九七頁)。まさにこの時、代助は三千代を平岡に「周旋」(一四一頁)したのである。「自分の鍍金が辛かった」、「早く金になりたいと焦つて」(九七頁)いた時のことである。これもまた、ちょうど日露戦争が終結する時期と重なる。父親の標榜する「胆力」や「熱誠」の価値基準や、社会の支配的な死生観から判断すると、代助の徴兵忌避は明らかに「不名誉」そのものだった。「名誉」の志願兵にならず、「名誉」の戦死もしたくなかった代助が、自分が「金」ではなく「鍍金」だと認識していた所以でもある。裏返すと、「名誉」を獲得することが本物の「金」になる近道でもあった。従つて、「過去を照らす鮮かな名誉」(一四一頁)を獲得する唯一の方法として、彼は三千代を親友の平岡に「周旋」することを選んだのに違いない。だが、ここには彼の誤算があった。新橋駅で見送られる場面で平岡が見せる「眼鏡の裏」の「得意の色」(一九頁)から、代助は平岡の「地金」(九七頁)を見てしまう。彼の「熱誠」を、平岡は「名誉」と「義侠心」(三三〇頁)であるとは〈認定〉せず、彼は結局「鍍金」から「金」にはなれなかったのだ。「代助は急に此友達を憎らしく思つた。家へ帰つて、一日部屋へ這入つたなり考へ込んでゐた」(一九-二〇頁)ほど衝撃を受ける。代助は実際、この日を境に、「誠実と熱心」は「当事者二人の間」で「相手次第」(四二頁)に起こるものだと言葉を捉え直し、自分と平岡、また自分と三千代の関係を繰り返し咀嚼し始めたと思われる。

(29) ヴァルター・ベンヤミン著、野村修訳「歴史の概念について」、今村仁司『ベンヤミン『歴史哲学テーゼ精読』』前掲、七八-七九頁。

4-2. 「自然の愛」と「名誉」

その三年後、代助は東京に帰ってきた三千代と再会する。そして、会う度に「自然の昔」を取り戻していく有り様がプロットを追いながら見えてくる。三千代が初めて代助を訪ねてきたとき、代助は「沈んでゐた」「此女の持調子」から「其昔を憶ひ出」している（六三頁）。「例の眼を認めて、思はず瞬を一つした」「例の眼」とは、「三千代の顔を頭の中に浮べやうとする」と（六二頁）、「ぼつと出て来る」「黒い、湿んだ様に暈された眼」（六三頁）である。この時、三千代は代助に自分が子供を産んだ後の「それから」を語っている。次に、三千代に頼まれた金策に応じて代助が小切手を持っていったときに、始めて「奥さん」と呼ばれ「眼を睜つて凝と代助を見てゐた」（一三三頁）三千代は、平岡の「それから」の放蕩ぶりを語っている。二人がその次に会った時、三千代は「銀杏返」を結び、手には三本の百合を提げて、「代助に眼と顎で招かれて」（一六三頁）書斎に入ってくる。ここでは、かつて菅沼兄と三人で谷中の家で百合を眺めていた時空間が甦ってくる。その次の再会では、代助は平岡を介さずに「明治民法上の夫の扶養義務を」「侵犯してしまっている」⁽³⁰⁾「紙の指環」を渡す。ここから、代助は三千代に対する「自然の愛」をはっきり意識するようになる。ついに、「代助は二人の過去を順次に遡ぼつて見て、いづれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた」（二三六頁）と思うようになる。そして、「今日始めて自然の昔に帰るんだ」（二七一頁）、「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ」（二七九頁）と代助は三千代に告白するのである。

姦通罪で裁かれる危険があるなかで、「死ぬ積で覚悟を極めてゐる」（三〇九頁）三千代、「凡てと戦ふ覚悟をした」（二八六頁）代助。悲壮とも言える男女の悲恋物語がここに成立する。しかし、ここでいくつかの疑問が残る。一つは「自然の昔」に、二人の間に「自然の愛」が存在していたとすれば、なぜ代助は「平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だ」（二三六頁）という三千代を「棄てゝ仕舞つた」（二八〇頁）のだらうか。新橋駅で的一幕後の「それから」において、代助にとって三千代の「眼」は忘れたいものであった。「三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代の斯う云ふ眼遣を見た」（六二頁）からだ。二人にとってお互いの眼はその気持ちを読み取る窓口になっていたと言える。帰京後の二人は単独で会う回数を追うごとに、眼で会話する場面が増えていく。この眼は代助に「自然の愛」を

(30) 小森陽一『漱石論——21世紀を生き抜くために』

岩波書店、二〇一〇年五月、一五六頁。

蘇らせる。だが、平岡に三千代を「周旋」した際にも、代助は三千代の「眼」を直視できただろうか。実は、この肝心なところがテキストのなかでは空白になっている。つまり、代助はここで故意に三千代の「眼」を無視していたことが推測されるのだ。すると、代助は「名誉」のために「自然の愛」を犠牲にしたことになる。

また、代助が三千代と「自然の愛」を取り戻していく過程は、同時に平岡との「隔離」（一四〇頁）が深まっていく過程でもある。代助に三千代との関係を打ち明けられた平岡は、「僕は君の推察通り夫程三千代を愛して居なかつたかも知れない」（三三一頁）と半ば認めている。しかし同時に、「僕の毀損された名誉が、回復出来る様な手段が、世の中にあり得ると、君は思つてゐるのか」（三二五頁）、「法律や社会の制裁は僕には何にもならない」、「名誉を回復する手段があるかと聞くんだね」（三二六頁）とも平岡は言う。眼鏡をかけているゆえに徴兵免除が自明である平岡が拘るのはやはり「名誉」である。徴兵から免れて「名誉」に与ることのできなかった代助と平岡は、三千代をめぐる関係性において「名誉」を憧憬しているのだ。

5. 終りに

代助という人物はきわめて複雑な思考回路をもった主人公である。鋭い神経に「遊民」という特殊な身分も相俟って、彼は思索する余裕を有している。だが一方で、彼は「始終論理に苦しめられてゐた」（一七五頁）。「願望嗜欲を遂行するのを自分の目的とし」、「無目的な行為を目的として活動してゐた」（一七七頁）。これは彼が目的の手前で思考停止していることを意味する一方で、その「願望嗜欲」の背後に、本人も掌握仕切れない無意識が存在することを意味している。

このような代助の意識の重層構造は、テキストの「それから」の重層構造を生み出す。そこには語り手により語られているものと、語られていないにもかかわらず「沈黙した声」で読者に訴えてくるものが生じる。落ち椿により立ち上がる心臓が破壊される死のイメージは、徴兵を忌避する代助の恐怖を甦らせる。彼の表層意識で前景化されている「自然の昔」の「自然の愛」の向こう側にも、徴兵と戦死の「名誉」を手に入れられない男性の屈折した「名誉」への憧憬が見え隠れしている。

周知の通り漱石も、ペンヤミンも徴兵を忌避した過去を持っている。菊池邦作によると、逃亡による徴兵忌避は徴兵令の初期からあり、明治二九年まで累計七万四千人以上になって

いる。また、仮病や身体毀損、犯罪による徴兵忌避も多数あった⁽³¹⁾。合法非合法を含めた徴兵忌避がかなり普遍的な問題であったこの時代に、多くの人が孤独と恐怖に戦って生きていたと思われる。目に入るすべてが真っ赤に染められていく結末の場面は、『血笑記』の狂気に捉えられたロシア人兄弟を彷彿とさせる。これは代助の死への恐怖が甦っていることを示唆している。日露戦争後もない一九〇九年に文学作品が「不名誉」な徴兵忌避を正面から取り上げることはもちろんタブーであった。しかし、『それから』では、この徴兵忌避の「沈黙した声」が作品の底流をなして読者の我々に訴え続けているのだ。

(31) 菊池邦作『徴兵忌避の研究』前掲、二八〇・三五八頁による。

